

敵潜の雷撃をのがれて

長野県 西村 保

私は大正元年十二月三十一日生まれ、第二補充で昭和十八年十月召集され、横須賀海兵団へ入団、久里浜の機雷学校で四か月訓練を受けた。新兵のときは普通の徒手訓練、基本的な訓練でした。

昭和十九年になって「第一〇二航空隊へ行くものはないか」と言われてので応募したのです。何処へ行くか分からなかったが、呉までは汽車で、呉からは船で台湾（高雄港に半日上陸）、それからシンガポール向け出発した。

シンガポールに着く一昼夜前に魚雷攻撃を受けた。私の船は七隻の船団の先頭の船だった。見張り（監視）を左右両舷一〇〇人ぐらい置いていた。「雷跡」と叫ぶ。私の船はそれをかわした。次の船の下真中へ命中した。子供の時見た日露戦争の日本海海戦の絵のように火を吹いて真っ二つに、後部から沈んでいって、船首が半分は

浮いていた。可哀想だと思った時、忠霊塔のような形で船が浮いていた。私は三回死にそこなったが、それが第一回目です。

シンガポールに上陸、これでお前たちは終りと言われたが、まだ南へ行きたかった。その時、陸軍の友人とそこで会ったが、まだ南へ行くと言われたので、幸せだなあと思った。ところがその人はとうとう帰ってこなかった。

当時シンガポールは戦場ではなかった。「命よりも国のために尽くすこと」は兵隊として当然と思った。「身は鴻毛より軽しと覚悟せよ」だから。我々は日本を守らなければならぬと思っていた。

次にシンガポールから転属命令が出て、ビルマのメルギー諸島（小さい島）の飛行場勤務となった。飛行機が三機ぐらいしかなかったが、警備隊だから歩哨などの勤務をしていた。

昭和十九年の勤務中に一度、島の村の中に爆弾を落された。私はその付近にいたが、難を免れた。これが二回目の危機でした。

戦争の具合が悪くなり、シンガポールに引き揚げるよう命令が来た。二十年になって、いよいよ引き揚げる時に日本ペイントのマークのような飛行機が来た。はじめは友軍機だと思って手を振っていたら爆撃された。英軍機だったので。七〇発ぐらいの爆弾が甲板へ落ちたが、貫通して海へ落ちた。もし爆発していたら船ごとやられて命はなかったと思う。これが三回目の危険でした。

それから二、三か月で終戦になったが、その後、耐えられないような重労働を二か年間強いられた。

炎熱、酷熱、悪疫の中の重労働、報復を込めた中の生活も理解して貰いたいと思うこと切である。

一〇二航空隊基地隊で八月十五日、終戦を知らされて、みな男泣きに泣いた。

幾日過ぎたことか、覚えているのは海軍の衣裳袋をかっついて、倉庫のような建物に集り、イギリス兵の机の前に行き身体検査後に衣裳袋はイギリス兵の後の火中に投げ込まれた。袋の中には自分の総ての財産が入っていた。海軍の一種軍装から真新しい短靴、貴重品などみな焼かれた。

それからマレー半島のゴムの林の丘に移され、テントを張り、そのキャンプ地の一張の中に六人ぐらいで暮らしたと思う。

毎日が暁の起床でトラックの迎えで始まり、夜は十時ごろから仕事によって十二時ごろまでのこともあった。

食事は少なく空腹の毎日が続いた。ある日、船着場のようなどころで働いている時、現地人の運ぶモッコから落ちたコブラ（椰子の実の乾したもの）を二、三拾って腹を満たす助けとした。このように約半年続いた捕虜生活であった。キャンプの中には床はなく、カヤ草を敷いた上にアンペラゴザを敷いて毎日の寝起きをしていた。ある時足の裏がチクチクし始めたので敷ものををはがして見ると、ゴム林の赤土の上に敷いたカヤ草の下で、高い気温と体温に草の芽生えが始まっていたのである。驚いた笑い話しだ。

貧しい毎日の中で、ある兵隊の淋しい話を聞いた。それは空腹に耐えられずゴムの実を食べて仲間の一人が死んだことだ。このころは毎日の労働も要領よくなり、キャンプにも時間前に早く帰られるようになってきたのにと

可哀想に思えた。

日本帰還が待ち遠しく、毎日毎日、何々部隊が帰るとかのニュースを聞く。自分たちの部隊はいつごろかと、毎晩椰子の葉の上に輝く大空の美しい星や月を眺めながら故郷のこと、親や妻子や親戚のことなどを思い浮かべた。

遠く海を越え、シンガポールに来て三年、ゴムの木が秋のように枯葉となり、また春のように新芽が出て青葉が繁るといふ、霜が降りなくても四季があるように素晴らしい現実を教えられた。

また、毒蛇やサソリ、海蛇、南方の珍しい動物に遭遇したが、今元気でいることを感謝しながら乗船命令を待っていた。とても永く感じていた。

昭和二十二年八月に入り、内地帰還命令が出た。みんなで万歳万歳で喜び、手製のリュックサックに（捕虜生活の中で作った）手持ち品を詰め込んだ。乗船は何日だったかは忘れた。佐世保に着く前に船上より内地が見えた時は、感激で胸がいっぱいになった。

佐世保より豊橋、伊那、実家へと夢中で歩き、家に着いた。

仏領印度支那 軍紀厳正 討部隊

長野県 中村正直

私は大正十一年九月生まれで、入営は十八年四月一日で、松本の東部五十部隊、現役で入営しました。

留守宅の方は父母や兄たちがいたし、独身者で体も良かったので、心配なく軍務に精を出せるだろうと思って、覚悟を固めていました。

入隊してから、船便の関係で三か月間内地で教育を受け、七月初ろ宇品港を出帆して台湾の高雄港で一週間ほど待機、もうそのころになると、米軍の潜水艦の攻撃が盛んになったのか情報を見て出帆したようです。我々も対潜、対空監視をしながら不安のうちに仏印のサイゴンに上陸した。ここは、小パリといわれるぐらいフランス風の都会だそうです。

私は第二十一師団歩兵第六二連隊要員で、連隊本部はビンエンにあって、そこで教育をやり直されました。仏